



漢詩を味わう

第159回

常娥 李商隱

雲母屏風燭影深 雲母の屏風 燭影深く

長河漸落曉星沈 長河漸く落ちて 曉星沈む

常娥應悔偷靈藥 常娥 応に悔ゆべし 靈藥を偷みし

碧海青天夜夜心 碧海 青天 夜夜の心

半透明の雲母を張り付けた屏風に、ろうそくの影が深々と映っている。

天の川は次第に落ち傾き、暁の星々も西の空に沈んでゆく。

常娥は冷たい月の宮殿のうちで、不死の靈藥を盗んで飲んだことをきつと悔やんでいることだろう。

みどりいろの大海原、青々と広がる天空、それを眺めつつ傷心しているに違いない。

《雲母屏風》 ガラスのような雲母を張った屏風。

《燭影》 灯火の光。

《長河》 銀河。

《靈藥》 不死の藥。

常娥は前漢時代の思想哲学書「淮南子」にある神話中の女性です。常娥は夫の羿の留守中に仙女西王母からもらった不死の藥を盗んで飲み、自分だけが飛び上がって月の宮殿に入ってしまったといわれます。「嫦娥」とも書き、中国の月探査機の名前にも使われています。また魯迅は「奔月」という常娥を題材とした短編小説を書いています。

この詩はなかなか難解で、様々な解釈があります。亡くなった妻を悼む詩「悼亡詩」とする説。家を出て女道士になったものの孤独に耐えきれない女性を風刺した詩とする説。さらに李商隱自身の政治的な身の進退を誤ったことへの感慨を託したとする説など賑やかです。日本の中国文学者高橋和巳氏の説は、夫の羿の裏切られた愛の思いを表わし、それも自分のもとを去って高位の者に身を寄せた恋人の心を思いやったと詩と解しています。この解釈が最も自然で、神話に託して裏切られた愛を嘆いた詩であることに違いありません。

また前半の二句は、常娥を包む情景と取る見方がありますが、恋人が去っていった羿をとりまく心象風景と見るのが自然でしょう。何れにしろ、冷ややかに清浄感が溢れる感覚は李商隱ならではの類ない独自性があります。

常娥が現れる李商隱の詩はほかにもあります。「霜月」では「青女素娥俱に寒に堪え、月中霜裏に嬋娟を闘わす」。『月夕』では「兔寒蟾冷桂花白し此の夜姮娥応に断腸なるべし」と常娥が登場します。いずれの詩でも、冷涼で清浄な世界で孤独と寂寥に耐えている常娥のイメージで、この詩に共通しています。

李商隱は晩唐の詩人です。唐詩は初・盛・中・晩の四期に分類され、文学史上「盛唐の極盛・中唐の再興・晩唐の変」ともいわれます。盛唐の時代は李白・杜甫・王維ら大詩人たちによって、人間の現実や自然などを心で感じたまま詠うことよって詩の美を構築しました。中唐の詩はこの流れをくんだ諷諭詩と呼ばれる政治批判など社会派的な詩が多くなります。これに対して李商隱や温庭筠など晩唐の詩人は、方向を大きく転換し、個人的な叙情の世界に沈潜して、独自の詩的世界を作り上げています。李商隱は詩に非政治的な空想性を大胆に導入し、とくに恋愛詩人として恋愛詩の名作を数多く残しています。

参考文献：唐詩鑑賞事典（東京書籍出版）・中国詩人選集・李商隱（岩波書店）

落葉秋山に満ち 征人久しく還らず 一声何れの処の雁ぞ 応に玉門関に向かう

落葉秋山に満ち 征人久しく還らず 一声何れの処の雁ぞ 応に玉門関に向かう

《大意》山に落葉の積もる秋の季節となったが、旅人は故郷に帰ることも出来ず長旅を続けている。ふと頭上を見上げると、はるか空のかなたを雁が鳴きながら玉門関に向かって飛んでゆく。(呉襄詩・秋吟)

白雁寒沙の月 黄雲老樹の秋

白雁寒沙の月 黄雲老樹の秋

小意書

《大意》白雁に寒い砂漠の月、黄色い雲に老いた木々の秋景色。(薩天錫詩句)

白雁寒沙の月 黄雲老樹の秋

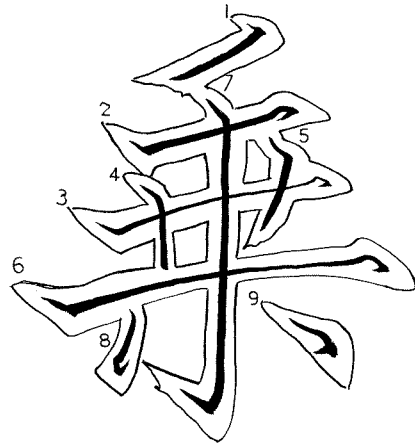
小意書

読み
興きように乗じて
即すなはち家と為さん
(興が湧いて気さえ済めば、その地を住処すまかとしよう)

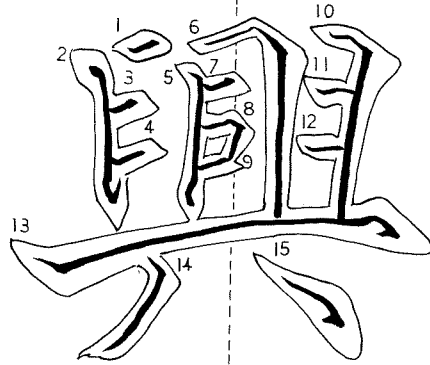
為 乗
家 興
即

佐藤象雲書

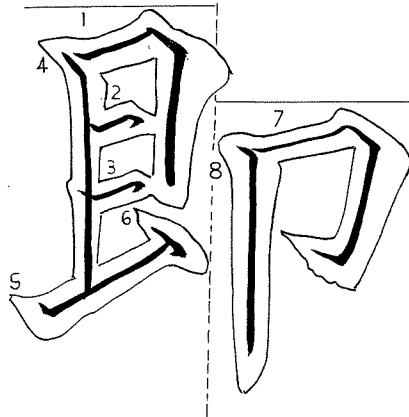
三横画の長短と分間に留意



中心の同を挿んで左右対向させる。



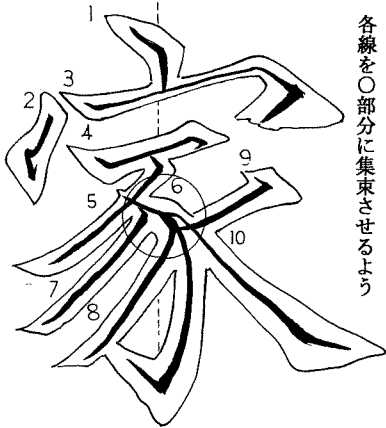
第五画は古法に抛り新たに起筆しているために常用漢字と総画数が異なる。旁を下げてバランスをとる。



第二画の左払いの角度に注意が必要。
第四画の右側は階段状にせずに引き締める。



三本の左払いは末広がり払いの角度を変える。
各線を○部分に集束させるよう



点画の増減について

興の中央部は、増減仮借法により「口」の一画を減じている。虞世南「孔子廟堂碑」や褚遂良「雁塔聖教序」に見える。「流」の旁の上部点を減じ、「澤」の下部横画を増すのもこの結構法による。古法・古典例に随うことが原則で勝手な増減は許されない。

一般部規定課題出品について
規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

杜甫詩
「春 帰」

苔徑臨江竹

苔徑 江に臨む竹

茅簷覆地花

茅簷 地を覆う花

別來頻甲子

別來 頻りに甲子

歸到忽春華

歸りに到れば 忽ち春華

倚杖看孤石

杖に倚りて 孤石を看

傾壺就淺沙

壺を傾けて 淺沙に就く

遠鷗浮水靜

遠鷗は 水に浮かんで靜かに

輕燕受風斜

輕燕は 風を受けて斜めなり

世路雖多梗

世路 梗ること多しと雖も

吾生亦有涯

吾が生も 亦た涯有り

此身醒復醉

此の身 醒めて復た酔う

乘興即為家

興に乗じて 即ち家と為さん

草書

行書

乗興即
為家

乗興即
為家

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

落日山
水好

乗興即
為家

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>我宿の庭の村萩咲きしより</p>					
<p>思ひぞいづる宮城野の原</p>					

伊達政宗

和泉溪石先生書

易輜攸畏属耳垣墻
 易輜攸畏属身垣墻
 易輜攸畏属耳垣墻

佐藤象雲書

音

イユウシユウイ
シヨクジケンシヨウ

略解

易輜は軽率なこと。これはもつとも畏れることで慎むべきこと。壁に耳ありの諺があるように、どこでも言行を慎むべきである。

罪 而 還 福

罪 而 還 福

罪あるも福に還れり

象 雲 臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書

(68)

「罪而還福」

この一節は、三藏法師が西域から經典を持ち帰り、翻訳して広めたことよって、従来、聖教の欠けていたところが完全なものとなり、民衆は罪があっても幸福になった。という部分の一節です。

「罪」もとは自と辛を合わせた「辜」につくり、始皇帝時代に罪の字に統一されたとのこと。縦横の各線が整然として美しい。

「而」一とノはやや左に位置して、下部は右空間を広く。

「還」シンニヨウは暢びやか。鬣を乗せて余裕がある。

「福」示偏は第一画点と横画間を広く、旁は「田」が大き過ぎぬよう。

又轉為情性

使轉を情性と為し

■孫過庭・書譜（初唐・西曆六八七年）の臨書

象雲臨

又轉為情性

『使轉為情性』

今回は「楷書は一点一画が形の本質をなし、筆の運びで情性をあらわす。」という一節の部分です。続けて孫過庭は、草書は逆に一点一画の置き方で情性をあらわし、筆の運びが形の本質である言っています。

この一節は解釈が難しいのですが、清の包世臣は「藝舟双楫」のなかで、「楷書は点画に平直を求めすぎると活字のような字になりがちで、これは楷書に曲線の要素がないからである。反面、リズムを主力において字形を整えようとすると、骨なしの書になりがちとである。」と言っています。また呉熙載の質問に対して書譜のこの句を引用して、人に置き換えて、形質を五官と四肢に、情性を動作や話しぶりに例えています。「使・性」は線が面的、直線的で、「轉・情」は曲線が主体です。太細強弱の変化に留意して臨書してください。